

第 64 回神奈川建築コンクール 住宅部門審査総評

審査委員 内田 青蔵

コロナ禍の影響で、この歴史ある神奈川建築コンクールの開催も滞っていたが、今年はようやく3年ぶりに実施できた。これまでコンクールに携わってきたひとりとして嬉しさとともに、改めてコンクールの目的である「建築物の質の向上を図るとともに、安全で安心かつ人や環境にやさしい魅力あるまちづくりを推進する」ことの重要性を再認識した機会ともなった。

さて、今年度の住宅部門の応募作品は39件。ちなみに3年前の令和元年度が36件であり、ほぼ同数の応募であった。ただ、もう少し前には60件前後の応募作品もあり、次年度以降の益々の積極的な作品の応募を期待したい。

応募いただいた作品は、従来同様に審査委員による第一次及び第二次審査を経て、入賞作品を決定した。これまで第一次は書類審査、そして、第二次は実際の現地視察を経た後に審査を行うこととしていたが、今年度は現地視察の予定時期にコロナ禍の第7波が押し寄せたこともあり、やむなく現地視察を中止せざるを得なかった。そのため、オンラインで現地から設計担当者らによる応募作品の内外の映像共有とその解説を行っていただき、審査委員は質疑応答を行った。その後、審査委員による投票結果をもとに、各委員の評価点に関する意見交換を行い、作品の評価点としてのデザイン性、時代に合わせた新しい生活の提案、さらには、まちづくりへの提案といった点を確認しながら最終的な評価を合議により決定した。その結果、今年度の表彰作品は、最優秀賞1件、優秀賞7件、アピール賞1件の合計9件となった。

以下、入賞作品について簡単に紹介したい。

最優秀賞「鎌倉大町の住宅」は、住宅地の隅に位置し、三方を開け放すことができる敷地の利点を生かした開放的な住まいで、内部空間も豊かで、また、その空間を確保するための木構造も熟慮された合理的な方法が展開されている。その自然と一体化された豊かな空間は、審査委員一同納得した質の高い作品である。なお、あまりにも開放的なため、温熱環境などの処理に関する質問が出たが、周囲の雑木林などが機能し、建物としてのコントロールはほとんど必要がなかったという返答を頂いた。

次に優秀賞の紹介である。「縮景の杜」、「鎌倉浄明寺の家」、「Yato no Yato」、「扇垂木の家」、「RIFF house」、「葉山の家」、「高津の家」の7作品が選ばれた。「縮景の杜」は、極めてコンパクトな一人暮らしの住まいであり、建物自体が施主を代弁するような優しさ溢れる個性的な作品となっている点が評価された。「鎌倉浄明寺の家」は、3間半の立方体を原型とするコンパクトな幾何学的空間で、周辺の景観を取り込んだデザインが評価された。「Yato no Yato」もコンパクトな住まいで、通風-採光用の中庭を取り囲んだひと繋がり室内空間の魅力が評価された。「扇垂木の家」はリビングが畳敷きの空間で、その上には

扇垂木が広がる平屋の住宅で、屋根構造の表現が評価された。「RIFF house」は鉄筋コンクリート構造の魅力を階段やベンチ・テーブルといった部分にも展開し、その素材感や力強さを空間の魅力として表現している点が評価された。「葉山の家」は、建物のデザインとともに、その豊かな敷地と塀の代わりに高低差を利用したアプローチ計画の魅力なども評価された。「高津の家」は、極めて素朴な住宅ながらも、周囲との関係や将来の増改築を睨み、かつ、ローコストを意識したデザインは住宅設計において常に追求すべき課題であり、そうした基本的取り組みの姿勢が評価された。

また、「夜と煌めきの隅で」はアピール賞（環境（くらし））として選ばれた。この作品も独身者の住まいであり、コンパクトで、極めて個性的な生活の場として計画されている。住まいが、夫婦と子供という核家族だけのものではない。そうした新しい時代の住まいのありようの可能性を追求した点が評価された。